大館の歴史散歩

古記録・紀行文を歩く ④

碧（あお）い目の旅人
―日本奥地紀行―

明治十一年六月十日、一人の英国人女性が、十八歳の日本人通訳を連れて東京を出発した。その名は、イザベラ・L・バート、四十七歳。今回紹介する「Unbeaten Tracks in Japan」（原著名日本の未踏の地　一八八〇年刊）の著者である。

同著は彼女が、同年九月十七日横浜港に帰るまでの約三カ月間、東北、北海道の各地を訪ね、見たこと、感じたことをありのままに書きつづったもので、妹のヘンリエッタや知人にあてた書簡が基になっている。第一信から第四十四信で構成されており、第二十六信から第二十八信の中に川口、持（餅）田川、大館、白沢、矢立峠の地名が見える。

同著のはしがきの中で、「日光から北の方の全行程を踏破したヨーロッパ人は、これまで一人もいなかった」と自負し、旅行に際しては「地方の住民から直接に話を聞くことの情報から事実を探り出し」とし、「正確さを第一目標」にしたと記している。

同著は、当時の庶民の生活、風俗、習慣を細かく観察しており、その内容は、当時を知る重要な資料的価値を有している。

彼女は、山形から院内に入り羽州街道を北上、七月二十八日、三十年来の記録的な大雨の中を大館に入った。その状況を、「増水した…中略…持田川、米代川を歩いて渡り、百人もの人が外国人の愚かさを眺めていた」そして、「今私は、日本で水の力の恐しさを少なからず知るようになった」と書いている。また、大雨の中の宿探しの折、「苦痛で身体が崩れそう」なときに、警官に後を付けられて旅券の提示を求められ、「全く不当な要求をする」と憤慨している。彼女は、大館と白沢に宿をとっているが、宿名が不明なことが残念である。

日本の都市部の文明化が進む中での農村部における貧しさを表現する一方、その村々を囲む山河の美しさを「太陽が照ると…中略…庭園のような野は天国と化してしまう」と表現。大館については、「人口八千の町で半ば崩れかかった人家がみすぼらしくたてこんでいた。木の皮で葺いた屋根は石で押さえてあった」と記している。

彼女は、日本の農村の家族関係に感心を示し、「いかに家は貧しくとも、彼らは、自分の家庭生活を楽しむ。少なくとも子どもが彼らをひきつけている」と述べている。このようなことは、「英国の労働者階級の家庭にはない」と比較しており、日本の農村の家族関係の温かさを見ている。

同著は、読めば読むほど、その観察力に驚かされる紀行文の一書である。

（日本奥地紀行―
平凡社東洋文庫収）

市役所史跡探訪会

私の本棚
中央図書館新着図書

『くじらの文化人類学』

ミルトン・M・R・フリーマン 編著
海鳴社

日本人は昔から「くじら」とどうかかわってきたのか。食物としての鯨、鯨にまつわる信仰、捕鯨文化から捕鯨の歴史的発達まで、「くじら」をめぐる文化人類学。

捕鯨の全面禁止がとりざたされる今日の国際世論の中で、その存続を求めて……。

一般書

◇赤い氷河期〔上・下〕（松本清張）◇ワイングラスは殺意に満ちて（黒崎緑）◇死がお待ちかね（B・ロペス）◇英雄伝説（三国誠広）◇雑魚のひとりごと（田中トモミ）◇危険なあなた（山崎洋子）◇黄昏のストーム・シーディング（大岡玲）◇ひたむきな女たち（中村喜春）◇白河夜船（吉本ばなな）◇夢の椅子（大原富枝）◇引越貧乏（色川武大）◇四万十川〔第2部〕（笹山久三）ほか

8月のテーマ関連図書コーナー　『赤』

親子読み聞かせ会
毎週金曜日　午後2時30分から

中央図書館の休館日・8月20日、24日

※9月1日から16日まで、本の虫干しのため休館となります。

市統計グラフコンクール

テーマ・自由。ただし小学校3年生以下は、観察結果をグラフにしたもの。

資格・小学校3年生以下の児童、4年生以上、中学生、高校以上の学生・生徒、一般の各部

応募方法・中学生以下の部はB2判、高校生以上の部はB1判サイズの用紙とし、パネル仕上げやセロハンカバーは認めない。

締め切り・8月28日（月）

応募及び問い合わせ先
市企画調整課広報統計係
☎49～3111（内線268）